

角倉了以の遺産

伏見はその歴史の中で、城下町、東海道の宿場町の一つ、そして古都である京都近郊の最大の内陸港へと発展した。伏見の成功は、伏見を経由して京都を大阪の貿易の中心に繋ぎ、そこから全国の都市へと結びつけた水運システムだった。

伏見の発展の鍵は、角倉了以(1554-1614)の名で成功した海外貿易商だった。

角倉は将軍徳川家康(1543-1616)に対し、深く流れが速い宇治川と淀川を繋ぎ、京都中央部の二条地区と伏見を結び、伏見を大阪の商業の中心地と結ぶ運河建設を許可するよう嘆願した。

角倉は、アンナムやシャムなどの港と貿易を許されていた「赤い印の船」である徳川の朱印船に接近できる主要な商人として、莫大な財産を得ていた。その後角倉は、彼の私財を投じて、高瀬川を開削した。

運河は 1614 年に開通し、伏見の運命を変え、城下町を外の世界へと続く京都の南門に変化させた。旅客船や貨物船に乗って、旅人、商人、政治家、観光客が、古都と内陸港の間を行き来した。この新しい運河により、伏見は主要な経済の中心地となった。日本で最初の銀貨が鑄造され、伏見は、幕府の政策の下で、1 年交代で江戸の首都に住むことを要求された西日本の大名たちの出発と到着の重要な地点となった。

明治時代(1868~1912 年)になって初めて、大阪―京都間の直通鉄道の出現により、伏見の星はついに勢いが衰えた。